

「栄光の王を迎える」

(詩篇24・1〜10)

一、主として現された神

1節の「地とそこに満ちているもの」と「世界とその中に住んでいるもの」は並行法で語られていますから、同じ思想が別のことはで語られたものです。詩人が思い描く「地とそこに満ちているもの」には、イスラエルの存在を脅かす人々も含まれていることでありましよう。ですが、「世界とその中に住んでいるもの」は「主のもの」なのです。皆さまの中に、「あの人がいたために、私の人生は狂ってしまった」と思われる方はいるでしょうか。天地を造られ、救い主イエス・キリストを遣わされた神を信じる者は、そのような思いに囚われてしまうことはありません。主が、大きな意味で、すべてを支配されていると受け止めるからです。

続いて、2節です。「主が 海に地の基を据え 川の上に それを堅く立てられたからだ。」とあります。当時の人々の世界観によれば、地は海の中にある島でした。創世記1章に書かれていますように、神は天空の上にある水と天空の下にある水を分けられ、天空を天と名づけられました。続いて神は、天の下の水については、「乾いた所が現

れよ」と語られ、乾いた所を地と名づけられました。そして詩人の世界観によれば、「主が 海に地の基を据え 川の上に それを堅く立てられた」のです。これは、神が地を支えられていることを言い表す表現です。

二、主の山に登り得る者

3節をご覧ください。「だが 主の山に登り得るのか。だが 聖なる御前に立てるのか。」とあります。山は、主なる神が住まいとされる神聖な所です。モーセはシナイ山で十戒を受け取りました。主イエス・キリストは山に登られ、大切な教えを弟子たちと群衆に教えられました。また、主イエスはペテロとヤコブとヨハネを連れて山に登り、そこで御衣が白く光り輝きました。その、主の山にだれが登ることができのでしょうか。ちなみに3節も、1行目と2行目が並行法で語られています。

「だが 主の山に登り得るのか。」は「だが 聖なる御前に立てるのか。」の意味です。

4節は語っています。「手がきよく心の澄んだ人 そのたましいをむなしなものに向けず 偽りの誓いをしない人。」と。ここに書かれていることは、詩篇15篇とよく似ています。ですが、異なります。15篇では、律法（トーラー）を守る者が主の聖なる山に住む、と語られています。24篇は、よりキリス

トの福音に近いと言えます。5節に「その人は 主から祝福を受け 自分の救いの神から義を受ける。」とあるからです。一人ひとりの人生を決定づけるものは、その人の努力よりも、神の祝福です。義についてもそうです。聖なる神が見られるなら、義人は一人もいません。義という、神の基準で測るところの正しさも、人間の努力によっては得られないものです。逆に言うと、神が義と見られるなら、その人は義とされるのです。それは、キリストの恵みによって実現しました。

5節を受けて、詩人は6節で語っています。「これこそヤコブの一族。神を求めらる者たち あなたの御顔を慕い求める人々である。」と。「これこそヤコブの一族。」とは、言い換えれば「これこそまことのイスラエル」です。とかく私たちは、新約聖書が語るユダヤ人の姿から悪いイメージを思い描きがちですが、本来のイスラエルはそうではないと確認したいです。ちなみに、「これこそヤコブの一族。」は、イエス・キリストを信じる教会に引き継がれています（ガラテヤ6・15〜16）。

三、栄光の王が来られる

7節以降は、1節から6節で語られた、高く聖なる所に住まわれる主を迎える歌です。7節の始めに「門よ おまえたたちの頭を上げよ。」とあります。門

はエルサレム神殿に入る際に通る門を指しますが、この詩篇においては、門が擬人化されています。どういう意味なのでしょう。この一文だけでは、意味を捉えにくいですが、ここも1行目と2行目が並行法で語られていますから、併せて読むときに意味が見えてまいります。2行目は「永遠の戸よ 上がれ。」です。そういうわけで、「門よ 起立せよ。戸よ 敬礼して 開けよ。栄光の王が入って来られる」の意味かと思われます。

四、栄光の王とはだれか

続いて、8節です。「栄光の王とはだれか。強く 力ある主。戦いに力ある主。」とあります。24篇は、イスラエルが迎えるべく栄光の王を、「強く 力ある主。戦いに力ある主。」すなわち「万軍の主」と捉えました。たしかに主なる神は戦いに勝つ、力強い主です。

ですが私たちは、栄光の王にもう一つの面を見る必要があります。それは、イエス・キリストに現された柔和な王です。その栄光の王について、マタイは次のように解説しています。「マタイ21・4〜5 このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。「娘シオンに言え、『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」と。